

附属学校の学びを公立学校に生かす —附属学校園の研究の活用の実践報告—

高井 規行

豊橋市立前芝小学校

I 公立学校に伝えたいこと

1 子どもの具体的な姿から学ぶ大切さ

6年間附属岡崎小学校に勤務し、問題解決学習を中心とした授業理論について、多くのことを学ぶことができた。在勤期間中に、愛知教育大学の教職大学院生や学生に授業づくりについて指導をする機会に恵まれた。授業理論を大学院生や学生に伝える中で、授業に対する考え方の背景にある子どもの姿、子どもを支える教師の思い等、言葉ではなかなか伝えきれない部分が多くあることを感じた。また、教職大学院生や学生に授業について指導した際の振り返りなどに目を通すと、子どもたちと教師の授業中のやりとりや、その時の具体的な姿、教師の講じたてだての意図や子どもの思考の変容など「そのような子どもの姿がなぜ見られたのか」「なぜ教師はここで発問をしたのか」といったことについて、考える機会があまりなかったことに気がついた。そこで、子どもの思考や教師の意図について、授業案よりも子どもの姿をもとに具体的に考えることができるようにするために、授業記録を積極的に活用する研修を充実させていくことが、子どもを中心に据えた「子どもを大切にせる授業」についての理解につながるのではないかと考えるようになった。

2 子ども大切にせる授業を伝えるために

「附属だからできる授業」ではなく、「どの公立学校でもできる」と言われるような、汎用性のある授業理論を伝えることが、公立学校に学びを還元する際に大切だと考える。そのために、研究指定校等から授業研究会や現職研修の要請があった際は、授業理論と学校

現場の教師の実践のどちらも大切にしながら、「子どもを大切にせる授業」のあり方について、具体的な子どもの姿をもとに伝えることを心がけてきた。特に、研修の中に授業分析の時間を確保して、授業中の子どもの姿や教師のてだてについて、授業記録をもとに参観者とともに考える時間を意図的に設定した。授業を参観した後のタイミングだからこそ考えることができる具体的な姿をもとにした教師の学び合いが、授業力向上に確実につながるものと考え、実践してきた。

II 実践報告

令和3・4年度に、豊橋市立高師小学校と蒲郡市立蒲郡北部小学校の研究に、それぞれ2年間携わった。まず、問題解決学習の授業づくりについて研修を行い、そこで学んだ授業理論をもとに身につけた授業構想力で考えた授業研究会を複数回行ってきた。各学校の研究主任から研修の成果について報告する。

1 豊橋市立高師小学校（坂口 肇）

(1) 子どもを大切にせる授業をするために

子どもを大切にせる授業をデザインするのは、授業者である。授業者の力量を高めるためには、自分のこととして考えることが大切である。そのために、研究授業の協議会において、Round Study（メンバーを入れ替えながらグループ対話を3度行い、最後にまとめを発表する）という手法は、力量を高めるためにとても有効であった。子どもの姿や言動から、どこが良くて、改善点は何なのか対話を重ねた。少人数だからこそ、授業を見て、率直な考えを話すことができたり、相手の考

えに対して質問したりすることを気軽に行うことができた。また、メンバーの入れ替えがあることで、他のグループの話題についても触れる機会ができ、考えが広がったり深まったりした。子どもの意識や教師自身の意図を再考することで「子どもを大切にする授業」に関連した新たな学びを得たり、生かしたりしたいことが明確になり、次の実践へとつなげることができた。協議会ごとに全員が振り返りを書き、まとめたものを研究だよりとして共有したところも学びにつながった。

(2) 職員が意識してきたこと

職員が意識してきたことは、子どもの思考についてだった。子どもの思考を大切にすることは、どういうことか、思考の流れをどう想定し、実際の授業で生かせるのか、難しいことであるが、その視点を全員で共有し、研究を推進できたことは大きな財産であった。また、研究を進めるにあたり、研究の内容について、対話する機会を何度もとった。理解できないこと、こうしたいという実践など、それぞれの思いや考えについて対話を重ね、互いに学び合ってきた。それを可能な限りに研究に取り入れた。子どもを大切にすることに加え、職員どうしを大切にすることを意識してきた研究でもあった。

以上のように、研究授業の検討会、研究についての対話で学び合ったこと、その学んだことを実際の授業に生かすこと、これらを行き来することが、研究の推進に大きくつながった。今後も大切にしたい。

2 蒲郡市立蒲郡北部小学校（星 亮輔）

(1) 授業力向上研修

「筋書き通りの授業にしない」「子どもの出方により授業のねらいに迫る道筋を変えてもよい」と子どもを大切にする授業の基本について学ぶことができた。研究授業では、どのような状況でも、自信をもち自分の考えを発信できる子どもの姿をめざし、研修を通して職員間の意思統一を図ることができた。

(2) 研究授業や協議会を通して学んだこと

「子どもの姿で語る」ことの必要性を学んだ。目標と評価を子どもの姿をイメージして具体的に設定することで、職員の授業の見方が変わった。授業記録も子どものつぶやきや表情を含めて記録ができるようになり、「〇時〇分に◆◆さんが、こうつぶやいて…だからこの教師のてだてについては…」といったように、具体的な子どもの姿をもとに、話し合いが進められるようになってきた。

(3) 若手教員研修会

若手教員対象の授業研究会では、学年に応じた授業における教師の出方など、授業づくりの基本について学ぶことができた。3年目になる1年生担任は、「できなかったことではなく、できたことを探す」「形を教えるのではなく、心に灯をともしることが大事」と教わったことを日常で生かしている。

(4) 実践につながる目標づくり

授業案の目標をどう設定するのか悩むことは多い。しかし、目標が明解な状態で授業を行うことで、授業までに必要な支援や、具体的なアドバイスができるようになることを、多くの研修を通して学んだ。子どもの姿と学校研究、教科をどのようにつなぐことが大切なのか、あらためて考えることができた。一教員として学校としても、自信をもって授業研究に取り組めるようになった。

Ⅲ 今後の公立学校との連携のあり方

「よりよい授業をしたい」という教師の願いの実現に向けて、授業理論と教師の実践をつないできた。授業力向上に向けて教師を支え、研究発表会等において学校に子どもの姿を通して還元することは、公立学校の教育力向上に向けて、大切な営みであると考えている。

これからも子どもとともに成長したいと願う教師の伴走者として尽力していきたい。